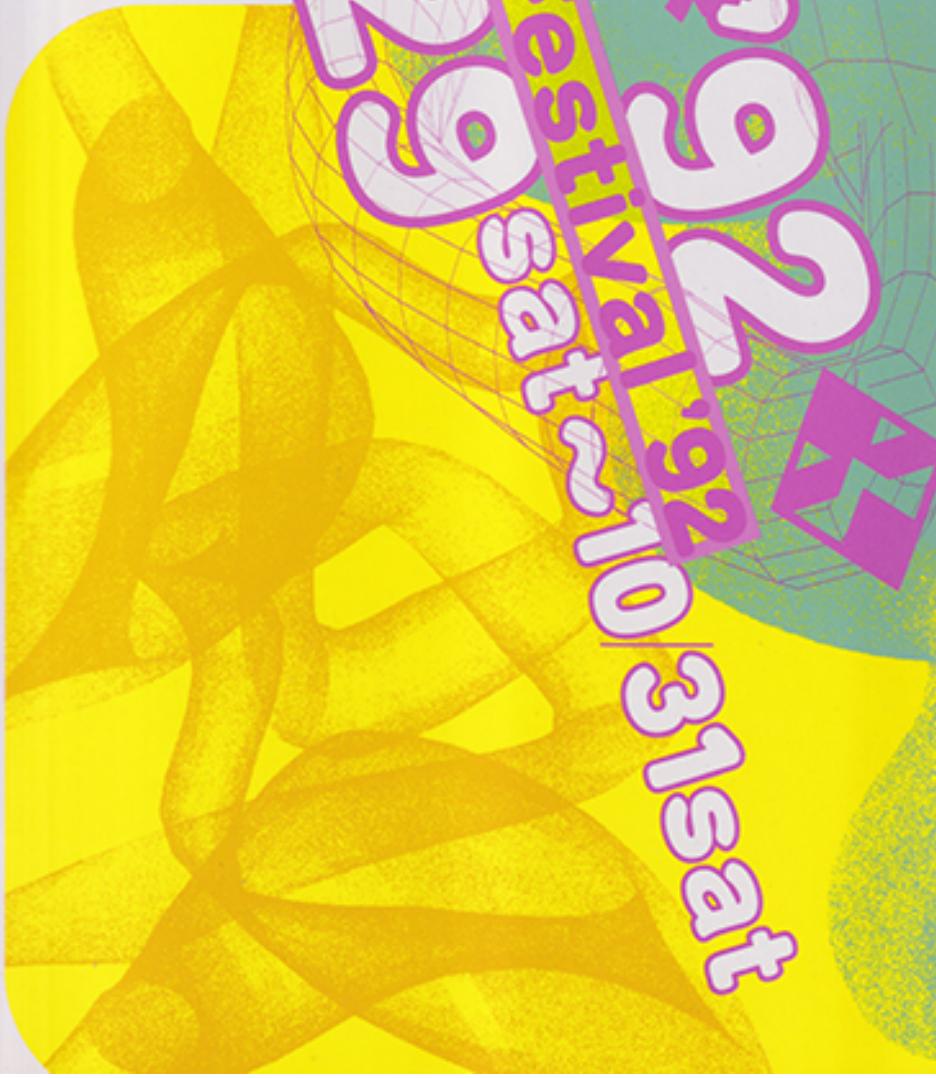


横濱国際映画祭
YOKOHAMA International Film Festival
1992年10月31日㈯



特別参加

THEATREWORKS/Singapore

シアターワークス/シンガポール

東南アジア祭'92

シンガポール・ミュージカル "Beauty World"

「ビューティー・ワールド」

作 script/

マイケル・チャン Michael Chiang

音楽 Music/

ティック・リー Dick Lee

演出 Direction/

オン・ケン・セン Ong Keng Sen

▶出演 Cast/

シンティー・シム Cindy Sim

ロジータ・ング Rosita Ng

ジェラルド・チュウ Gerald Chew

アレック・トック Alec Tok

ノラ・サモスイル Nora Samosir

ジェイリン・ハン Jalyn Han

タン・ケン・フア Tan Kheng Hua

トニー・ヤオ Tony Yeow

タン・イエン Tann Yean

リザル・アヤール Rizal Ahyar

ノーリナ・モハマド Noorlinah Mohd

デボラ・png Deborah Png

ジャネット・ング Janet Ng

アレックス・アビシェガナーテン

Alex Abisheganaden

シアターワークス

マレー系、中国系、インド系からなる多民族国家シンガポールは、マレー語、マンダリン語、タミル語、英語の4言語を公用語としている。演劇もマレー、マンダリン、タミルのそれぞれの言語で上演されてきたが、こうした民族の枠を乗り越えるために、初の英語によるプロ劇団として、俳優のリム・ケイ・トン、リム・スイア・チョン、舞台美術家のジャスティン・ヒルによって1985年に創立されたのが「シアターワークス」である。いまやシンガポールを代表する劇団に成長したこの劇団は、中国系、マレー系、インド系をはじめ、オーストラリア、イギリスなど、さまざまな国籍のスタッフが関わり、レパートリーにも、ブロードウェイ・ミュージカルから三島由紀夫『近代能楽集』までといった幅広さを持っている。本年2月には、シンガポール、マレーシア、日本の3国共同制作で、吉田日出子共演の『スリーチルドレン』を日本初演、この8月には、エディンバラ・フェスティバルで『毛夫人の思い出』を上演したばかりである。

作品解説

舞台は'60年代半ばのシンガポール、ちょうどシンガポールがマレーシアから分離独立を果たした頃。片田舎で育った少女アイヴィーは、幼い頃に失踪した父を探して大都会シンガポールにやってくる。父がキャバレー「ビューティー・ワールド」に関わりがあるらしいと聞いたアイヴィーは、さまざまな人間模様のうごめくこのキャバレーで、愛と真実の数々のドラマを経験し、人生の試練を積んでゆく。'60年代シンガポールで一世を風靡した「広東メロドラマ」のスタイルをとったこの作品は、シンガポール人の日常英語であるシングリッシュ(シンガポール・イングリッシュ)を初めて舞台にのせた作品としても知られ、イギリスの長い統治を経てすっかり母語となつたシングリッシュが依然として母語として認知されないことに強く疑問を投げかけた。また、作・音楽、演出の3人は、いずれも'50年代末から'60年代初めにかけての生まれで、経済成長の時期に成長した彼らの、失われていったものへの旅、

9/20[日]—9/23[水]

シアターコクーン



contents

演劇祭開催にあたって 稲谷道明	2
目次	3
ご挨拶 鈴木俊一/内田弘保	4
▶対談「芸能・歴史・伝承」藤間正勝/山口昌男	5
▶プレゼンツ 海外	9
ヴィム・ヴァンデケイビュス/ベルギー	10
キインボックシアター/コートジボワール	14
イロトピーフランス	18
特別参加 シアターウークス/シンガポール	20
米国 ザ・ニュー・シアター/カリスマ	22
▶プレゼンツ 国内	25
沖縄芝居実験劇場 沖縄	26
劇団1980 東京	28
劇団M.O.P. 京都	30
テーマプロデュース 新・東京物語「東京大仙心中」	32
集中講座 伝統芸能再発見	36
トークセッション 「21世紀を目指す女優とは…」	39
音楽 地人会「収容所から来た遺書」	40
音楽 Dance Selection	41
音楽「芸能大学・からだとことばのレッスン」「心の宇宙・転生」	42
▶地区演劇祭・プリンシ部門	43
北東京[実験]演劇祭	44
下町演劇祭	46
池袋演劇祭	48
みなと演劇祭	54
プリンシ部門	56
▶スケジュール一覧表	64
▶会場案内図	70
東京国際演劇祭'92 役員・委員	72

自分自身(アイテムティティ)を探るための旅がこの作品である、ともいわれる。1988年のシンガポール藝術祭で開催初のオリジナル・ミュージカルとして初演され、3年前、CD「マッド・チャイナマン」で、日本にも彗星のように登場し、東南アジア・ポップスブームを巻き起こしたディック・リーが初めて演んだミュージカルでもある。

THEATREWORKS/Singapore Beauty World

Singer Dick Lee, a leader of the Asian pops world, playwright Michael Chiang, a leader in contemporary theatre, and stage director Ong Keng Sen created Singapore's first original musical in 1988. They have boldly integrated the popular 1960s Singapore "Koto Melodrama" style with the daily-life English of Singaporeans known as "Singlish" for the first time in theatre history.

and more than anything else the wonderful music of Dick Lee to produce a work that has been lauded as the "memorial work of Singapore theatre."

The play is set in Singapore in the late 1960s, just about the same time that Singapore gained its independence from Malaysia. A young girl named Ivy who was raised in the countryside comes to the metropolis of Singapore to search for her father who disappeared when she was still a small child. Ivy has heard that her father has some connection to the cabaret called Beauty World, so she goes and takes up residence at this gaudily illuminated establishment. The innocent Ivy experiences numerous dramas of love and truth in the whirlpool of human types who frequent the cabaret, as she learns about the trials and tribulations of life.

シアターワークスを訪ねて/村川英

今年のシンガポール・アート・フェスティバルはシアターワークスの「プライヴェート・パーティ」が最終公演を飾った。その初日の朝、シアターワークスを率いる演出家のオン・ケン・センにインタビューするため、本拠地のフォート・カニングにあるオフィスを訪ねたのだが、そこはシンガポールの中心部にある、緑したたる美しい公園であった。これほど、恵まれた環境にオフィスとスタジオを持つ劇団というのも、世界でも珍しいのではないだろうか。「60年代に生まれた日本の小劇場がハングリーな状況の中で誕生したのに比べたら、何とまあ、恵まれていることか」というのが実感だった。

大きな団体に重負をのつけたオン・ケン・センはシアターワークスについて実に雄弁に語ってくれたのだが、要約すれば、シンガポール人としてのアイテムティティを問うという強烈なメッセージと、それとは対照的な「僕は前南劇出身の演出家で、「60年代に誕生した実験演劇に影響を受けている」ということだったろうか。そのことはその日のオープニング・パーティでシアターワークスの創立ディレクター、現在は舞台美術を担当するジャスティン・ヒルや、作者のマイケル・チャンに会って確かめることが出来たが、彼らはシンガポール演劇の創立者という強烈な自意識に支えられているように見えた。今回上演される「ビューティー・ワールド」は「60年代のシンガポールのキャバレーを舞台に、まさに彼らのアイテムティティを見ているわけだが、その手法が広東メロドラマというのも親しみを感じさせるものがあった。」「プライヴェート・パーティ」は性転換した男女の物語だが、それを人気テレビ番組の中で取り上げるという、オカマとテレビの内幕ものを舞台化したようなアップ・ツー・テートな感覚と(しかも観客席にビデオ・モニターを何台も組んでいた)その心理分析は古風と思われるようなメロドラマに終始していたことも、オン・ケン・センの「演劇の伝統としてはシンガポールには広東メロドラマしかない」という言葉を裏づけているよう見えた。





定価960円(本体922円)